

保育所・幼稚園における「障害」のある子どもおよび、  
いわゆる「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究（1）  
－「運動会」における支援を中心にして－

Questionnaire Survey on Nursery School and Kindergarten Children  
with Disabilities and Difficult Behavior (1)  
－focussing on Supports at Athletic Festival－

佐藤 慎二 高倉 誠一 広瀬 由紀 植草 一世 中坪 晃一

要旨：保育所・幼稚園における「障害」のある子どもおよび、いわゆる「気になる」子どもの活動参加の状況を把握し、そのために必要な環境要因・支援条件を検討することを目的とした。先行研究の検討からは、①「障害」のある子どもだけでなく、近年、「気になる」子どもへの支援が注目されていること、②保育所への質問紙調査による状況調査はあるが、幼稚園の状況が十分に把握されていないこと、③「気になる」子どもの支援にあたっては、環境要因・支援条件の重要性が指摘されていること、しかし、④環境要因・支援条件は十分に明らかにされていないこと等を指摘した。

そこで、本研究では、①幼稚園も対象に含め、②「障害」のある子どもと「気になる」子どもを対象に、③環境要因・支援条件の検討に焦点を当てるため、④「運動会」での具体的な支援と子どもの様子との関係を明らかにすることを目的に、⑤質問紙調査をC県の全保育所・幼稚園を対象に実施することとした。

Key Words: 保育所、幼稚園、「障害」のある子ども、「気になる」子ども、  
運動会、環境要因・支援条件

---

## I 問題と目的

「今後の特別支援教育の在り方」<sup>33)</sup>の答申以来、小学校・中学校の通常の学級に在籍するLD、ADHD、高機能自閉症等（以下、軽度発達障害と略す）の子どもへの教育的対応は「緊急かつ

重要な課題」とされ、文部科学省は特別支援教育の体制整備を全国で進めている<sup>19)</sup>。それに伴い、特別支援教育に関する通常の教育分野での関心も高まっている<sup>7)8)24)26)34)35)36)37)38)40)</sup>。中央教育審議会による「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」<sup>5)</sup>もあり、制度改革も含めた軽度発達障害の子どもへの支援や体制整備に関する動向が注目されている。

一方、保育の分野では、近年、軽度発達障害やいわゆる「気になる」子どもへの関心が高まっている。保育関連の一般誌での特集<sup>12)14)29)39)41)</sup>、書籍の刊行<sup>16)21)31)</sup>、実践報告<sup>17)28)42)</sup>がされるようになってきた。文部科学省も、平成17年度より、幼稚園にまで事業対象を拡大させた「特別支援教育体制推進事業」<sup>9)</sup>を展開している。そのため、小学校・中学校での特別支援教育の推進と並行して、保育の分野でも軽度発達障害の子どもや「気になる」子どもへの支援の検討が今後さらに求められると考える。

また、保育者への質問紙調査により軽度発達障害の子どもや「気になる」子どもへの支援内容や支援体制を検討しようとする試みも多く報告<sup>2)6)10)11)13)15)22)27)</sup>されるようになってきた。「気になる」子どもの定義は、明確ではなく、それぞれの研究によって幅がある。しかし、・何らかの「障害」があるとの医学的診断がない、・その年齢にふさわしい子ども像から逸脱した部分がある、・保育を進める上で「気になる」点があったり、特別な配慮を要していたりする等がその状態像として指摘されている。さらに、平澤ら<sup>10)</sup>、本郷ら<sup>11)</sup>のように、「気になる」子どもの中に知的障害やADHD等の「障害」も想定している研究もある。そこでは、「気になる」子どもの特徴を挙げた詳細な目録を用意し、それに該当する場合を「気になる」要件としている。いずれの場合も、医学的診断のある子どもだけを対象とする質問紙調査ではないため、「気になる」子どもの判断の幅は、保育者の主観にゆだねられていると言えよう。

以上のように、先行研究での「気になる」子ども像は各研究の特徴や回答者である保育者の主観により幅があることが想定され、また、調査内容や調査規模等も異なる。しかし、それらの結果からは以下の諸点が見出される。

- ①保育所、あるいは幼稚園には少なからず「気になる」子どもが在籍していること、
- ②「気になる」側面は、発達や障害に関することよりも、友達関係でのトラブルを含む行動上の問題が多い<sup>6)13)15)22)27)</sup> こと、
- ③「気になる」子どもの年齢や特徴等の個人要因だけでなく、保育内容や保育者の子どもの見方・関わり方、友達（集団）との関係等を含む環境要因・支援条件の検討が重要である<sup>10)11)15)</sup> こと、
- ④「障害」との医学的診断がない子どもの方が、「気になる」子どもとして意識されやすい<sup>10)11)</sup> こと
- ⑤「障害」のある子どもの場合は、加配をはじめとした支援体制を構築しやすいのに対して、「気になる」子どもの場合は、不十分である<sup>10)</sup> こと、

- ⑥「気になる」行動上の問題が生じやすい保育場面として、「クラス活動、友達との関わり、課題活動グループ、集会室活動、特別行事」が多かった<sup>10)</sup>こと、
- ⑦「気になる」子どもへの支援として「促し方を変える」「良い行動を教える」等のその子どもへの直接的な支援が挙げられるが、その効果については疑問を抱く保育者が多く、支援に困難を感じている<sup>10)</sup>こと、
- ⑧「席の場所などを考慮する」等の環境を整える支援も多く行われているが、その効果についての結果は示されていない<sup>11)</sup>こと、
- ⑨保育者へのコンサルテーションの必要性がある<sup>2)10)11)22)</sup>こと等である。

一方、先行研究の課題としては以下が挙げられる。

#### ①調査対象としての幼稚園総数の少なさ

上記7つの先行研究で明らかにされている限りでは、回答のあった保育所総数が300であるのに対して、幼稚園は金田ら<sup>15)</sup>の研究による27園にすぎない。金田ら<sup>15)</sup>の研究では保育所と幼稚園とが一括処理されているため、保育所と幼稚園での保育環境の違いによる結果に差異が見いだせるのか否か明らかではない。保育所と幼稚園ではその保育内容にも違いがあり、環境要因・支援条件の検討を行う上では両者の比較が重要であると考えられる。その意味では、先行研究における幼稚園の調査対象数は不十分と言える。先に触れたとおり、現在、文部科学省によるモデル事業に幼稚園も加えられたことを踏まえれば、今後は幼稚園における「気になる」子どもの様子の把握と支援の検討が求められよう。

#### ②「気になる」子どもの特徴や“行動目録”の妥当性への疑問

「気になる」子どもの様子をいくつかの観点から示す調査者の意図があり、回答者の立場からは記入しやすくなる。しかし、以下のような課題を指摘できよう。・先行研究で環境要因・支援条件の重要性が指摘されるものの、“行動目録”により「気になる」側面を子ども個人属性として示唆し、強調しかねない。・その結果、「気になる」様子を環境要因・支援条件との関係で把握する際のバイアスとなる可能性を否定できない。・“行動目録”を用いても、最終的には保育者の主観によらざるを得ない。・むしろ、“行動目録”を用いることにより、回答者に何らかの「障害」を示唆し、対象の子どもやその保護者に不利益を与えかねないという研究倫理上の検討が不足している。

#### ③「気になる」背景としての環境要因・支援条件の検討の不十分さ

平澤ら<sup>10)</sup>の研究では「気になる」行動上の問題が生じやすい場面として「クラス活動、友達との関わり、課題活動グループ、集会室活動、特別行事」が挙げられているが、どのような状況下で、どのような活動に取り組んでいたのか等の具体的な支援のありようは明らかにされていない。すなわち、先行研究では、各活動の計画段階でどのような手立てが講じられていたのか、その結果として、子どもに対してどのようなフィードバックをしていたのか等

の「気になる」様子の背景にある環境要因・支援条件は検討されていない。「障害」を個人と環境との相互作用から捉える観点はすでに時代の思潮<sup>1)25)</sup>であり、子どもの様子を踏まえて、計画－実施－評価（Plan－Do－See）のサイクルで実践を展開していく方法論が求められている<sup>18)33)</sup>。どのような環境要因・支援条件の下での「気になる」という評価になっているのか、その把握が求められよう。その検討の積み重ねが具体的な支援方法を導くことになると考えられる。質問紙調査から具体的支援方法を導き出すには限界もあろうが、上記の点が明確にされておらず、先行研究に共通する最も大きな課題と考えられる。

#### ④「障害」のある子どもを含めての検討の不十分さ

「障害」のある子どもについては、各地で受け入れが進んでいる状況もある。そのためか、「気になる」子どもの先行研究では、医師の診断による「障害」の有無が不明確<sup>2)6)13)15)22)</sup>であったり、「障害」がある場合を除いたり<sup>11)</sup>している。平澤ら<sup>10)</sup>は、「障害」のある子どもをその対象に含めているが、幼稚園が調査対象となっていない。先行研究からは、保育者の立場で「障害」のある子どもが「気になる」子どもとして意識されているのか否かについては十分な検討がなされていない。

ところで、平澤ら<sup>10)</sup>も指摘するように「気になる」行動が生じやすい場面として特別行事が挙げられている。この結果は、「障害」のある子どもや「気になる」子ども、特に自閉的傾向のある子どもの中には、練習・準備期間中も含めて日課の変更があったり、集団活動が多く求められたりする特別活動を苦手に行っていることが多い<sup>21)32)</sup>とされる見解を数値的に実証したと言える。

そこで、筆者らは、特別行事の一つである運動会とそこでの具体的な支援のありように着目することとした。運動会に着目した主な理由は、・運動会、もしくはそれに近い行事はどの保育所・幼稚園でも展開されていると考えられるため、各園・所での支援のありようを比較しての検討をしやすいこと、・保護者の期待も大きく、多くの子どもたちが楽しみにしている行事である<sup>20)23)</sup>ため、そこでの支援は、計画－実施－評価（Plan－Do－See）のサイクルの観点からも、検討されていると考えられること、・「障害」のある子どもや「気になる」子どもがいる場合、計画段階からその個への支援の検討も行われている可能性が高いと考えられたこと等である。すなわち、運動会という具体的保育場面に限定することによって、「障害」のある子どもや「気になる」子どもへの具体的な支援方法を見出し、考察を加えやすいと考えた。

以上を踏まえて、本研究では、以下の諸点の検討を目的とするものである。

1. 保育所・幼稚園での運動会の概要を把握すること
2. 「障害」のある子どもや「気になる」子ども在籍の有無を含む状況を把握すること
3. その子どもの中から、特別な配慮や支援を最も要する子どもについての運動会における具体的な支援を把握すること

4. 以上の把握を踏まえ、「障害」のある子どもや「気になる」子どもへの具体的な支援方法の詳細な検討を行うため、事例研究を行うこととする。

## II 方法

### 1. 調査対象

C県内全ての保育所（678園）と幼稚園（591園）合わせて1269園に質問紙を郵送し、返信用封筒にて回収された。尚、公立・私立保育所については、財団法人こども未来財団のデータベース<sup>43)</sup>に依拠し、C県内の全保育所を把握した。私立幼稚園については、千葉県総務部学事課のデータベース<sup>4)</sup>、公立幼稚園については、「千葉県教育便覧 平成17年度版」<sup>3)</sup>によりC県内の全幼稚園を把握した。

### 2. 調査期間

調査用紙は2006年2月20日に配布し、3月17日までに回収された。この時期は、・どの保育所・幼稚園にあっても運動会を終了しており、・子どもの様子をおおむね把握し、・運動会を含む年間の保育活動の総括の時期に当たり、・次年度に向けての方向性を検討する時期でもある。そのため、この時期に調査を実施した。

### 3. 調査内容

保育所・幼稚園の概要に関する項目、・平成17年度の運動会全般に関する項目、・運動会への参加に特別な配慮や支援が必要だった子どもと具体的支援に関する三つの大項目を設定し、仮調査項目を作成した。その仮質問紙により、現職経験20年以上の保育所元所長2名、保育所長1名及び幼稚園元園長1名、幼稚園長1名、幼稚園副園長1名の合計6名に予備調査を依頼し、調査内容の妥当性及び質問表現の適切性についても評価を得た。その結果を踏まえ、以下のよう項目を設定した。

#### (1) 保育所・幼稚園の概要に関して

- ①記入者情報（職名）、②保育所・幼稚園の別及び公立・私立の別、③在所（園）児数の合計、④クラス編成の状況（年齢別、年齢縦割り等）

#### (2) 平成17年度の運動会全般に関して

- ①運動会の有無、②運動会の開催月、③運動会を意識した活動の開始時期、④運動会の開催場所

#### (3) 運動会への参加に特別な配慮や支援が必要だった子どもに関して

- ①医学的診断を受けている「障害」のある子どもの在籍数

- ②以下の条件に該当する「気になる」子どもの在籍数—「・現時点では、なんらかの「障害」があると診断されていない子どもで、・その年齢の（できれば誕生日が近い）同姓の子どもと比べて、・複数の保育者から見て、なんらかの配慮や支援が必要と考えられる子ども」。\*本研究では先の検討に基づき、“行動目録”を用いず、「複数の保育者」による判断での「なんらかの配慮や支援」の必要性の有無という環境要因を重視することとした。
- ③運動会参加にあたって特別な配慮や支援が最も必要な子ども1名を選ぶ—「障害」のある子どもか、「気になる」子どもかを問わず1名
- ④特別な支援等が最も必要だった子ども1名の様子
- ・医学的診断を受けている場合は以下から選択—知的障害、肢体不自由、聴覚障害、視覚障害、言語障害、病弱・虚弱、注意欠陥／多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）、知的な遅れのある自閉症、高機能自閉症・アスペルガー症候群、その他
  - ・「気になる」子どもの場合は、自由記述
- ⑤その子ども年度当初の年齢
- ⑥その子どもの在園（所）年数
- ⑦その子どもの運動会に向けた活動（練習等）の期間の様子を以下から選択
- ・ダンス等の振り付け、あるいは、活動の内容自体がなかなか覚えられない様子
  - ・活動の流れや順番に見通しがもてない様子で、周りの子どもの様子を見て動いている様子
  - ・組み分けや自分の所属、待機場所や応援席への移動等がなかなかわからない様子、
  - ・運動会の練習が始まると、友だちとのトラブルやパニックが多くなるなど落ち着かない様子
  - ・その他自由記述
- ⑧その子どもの運動会への活動参加に向けての具体的配慮や支援についての自由記述
- ・運動会全般に関すること：種目・演目の工夫、運動会当日までの展開の工夫等、クラス（あるいは、学年や所園）全体に及ぶ配慮や支援（以下のような記入例を示した：練習期間はふだんの生活と違うので落ち着かなくなってしまった。そこで、練習期間中、運動会に関わる活動を毎日同じ時間帯に展開できるようにした。・リレーでは、足が遅く、どうしても遅れてしまうので、子どもたちで話し合い、その子が半周走り、残りを他の子が走るようにした。）
  - ・その子どもへの保育者による個別的配慮や支援（以下のような記入例を示した：保育者ができるだけその子どもの近くで、さりげなく応援するようなことを繰り返しているうち、面倒見のよい子が保育者の姿をまねて、その子どもの世話をしてくれるよう

になった。・運動会の流れ(種目・演目の出番等)がなかなか理解できず落ち着かなかつたので、絵カードでスケジュールを示す等した。)

⑨運動会当日のその子どもの様子ー以下の5件法により選択

- ・大変よく参加できたように感じる
- ・その子どもなりによく参加できたように感じる
- ・どちらとも言い難い
- ・あまり参加できなかつたように感じる
- ・ほとんど参加できていなかつたように感じる

⑩その子どもの運動会での様子を踏まえて有効だった手立てと不足していた手立ての自由記述ー・運動会全般に関すること、・その子どもへの個別的配慮や支援に関すること

尚、本研究は、現在、質問紙を回収・集計中である。その結果を踏まえ、複数の保育所・幼稚園を対象とした事例研究に入る予定である。本研究の結果については、改めて、本研究紀要及び関連の学会・学会誌等に報告・発表予定である。また、本研究は平成17・18年度植草学園短期大学共同研究助成金の援助を受けており、記して感謝します。

## 文 献

- 1) American Association on Mental Retardation (2002): Mental Retardation Definition, Classification, and Systems of Supports 10th Edition.
- 2) 芦澤清音・五十嵐元子・浜谷直人 (1999) : 保育において「気になる子」のタイプとその発達援助 (2), 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 382.
- 3) 千葉県教育庁企画広報課 (2005) : 「千葉県教育便覧 平成17年度版」, 教育調査統計研究会.
- 4) 千葉県総務部学事課 (2005) : [http://www.pref.chiba.jp/syozoku/a\\_gakuji/index.html](http://www.pref.chiba.jp/syozoku/a_gakuji/index.html).
- 5) 中央教育審議会 (2005) : 特別支援教育を推進するための制度の在り方について (答申).
- 6) 五十嵐元子・芦澤清音・浜谷直人 (1999) : 保育において「気になる子」のタイプとその発達援助 (1), 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 381.
- 7) 石井哲夫他 (2004) : 児童心理6月号臨時増刊 LD・ADHD・自閉症・アスペルガー症候群「気がかりな子」の理解と援助. 金子書房.
- 8) 石塚謙二・海津亜希子・廣瀬由美子・森秀一郎他 (2005) : LD、ADHD、高機能自閉症等気になる子への支援完全Q&A. 小学館.
- 9) 石塚謙二 (2005) : 平成17 (2005) 年度文部科学省予算, 発達の遅れと教育, 572, 54-55.
- 10) 平澤紀子・藤原義博・山根正夫 (2005) : 保育所・園における「気になる・困っている行

- 動」を示す子どもに関する調査研究. 発達障害研究, 26 (4), 41-51.
- 11) 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003): 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究. 発達障害研究, 25 (1), 50-61.
  - 12) 福重祥子 (2005): ちょっと気になる子どもと保護者への支援・実践例, 幼児と保育, 51 (3), 62-63.
  - 13) 岩立京子・竹田小百合・吉田真弓 (2001): 保育者がとらえた幼児の気になる行動及び保育者の対応について. 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 626.
  - 14) 神田英雄・佐伯志津・関根美保子・大宮勇雄 (2004): シンポジウム 保育実践上の困難をのりこえる視点, 保育の研究, 20, 8-35.
  - 15) 金田利子・今泉依子・青木瞳 (2000): 集団保育において「気になる」といわれている子の実態と対応. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 387.
  - 16) 菅野満喜子・大丸ミヤ子・萌木立みどり (2003): 心の保育を考える. 学習研究社.
  - 17) 水内豊和・増田貴人・七木田敦 (2001): 「ちょっと気になる子ども」の事例にみる保育者の変容過程, 保育学研究, 39 (1), 28-44.
  - 18) 文部科学省 (2004): 小・中学校におけるLD (学習障害), ADHD (注意欠陥/多動性障害), 高機能自閉症の児童生徒への教育的支援体制の整備のためのガイドライン (試案).
  - 19) 文部科学省 (2005): 特別支援教育推進体制モデル事業の実際, ぎょうせい.
  - 20) 宗高弘子・前橋明 (1989): 幼稚園における運動会の現状分析, 日本保育学会第42回大会研究論文集, 562-563.
  - 21) 無藤隆・神長美津子・柘植雅義・河村久 (2005): 気になる子の保育と就学支援. 東洋館出版, 48-49.
  - 22) 西澤直子・上田征三・高橋実 (2003): 保育所における「気になる子ども」の実態と支援の課題, 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, 745.
  - 23) 太田光洋・金田正一・相澤伸幸・阿久津紀子・長谷川桂子・中山美知子 (2001): 幼稚園と保育所における運動会の観客調査-保育内容としての運動会の検討-, 旭川大学女子短期大学部紀要, 30, 19-32.
  - 24) 大和久勝 (2005): 特集 「軽度発達障害」の子どもと集団づくり. 生活指導, 614.
  - 25) 佐藤久夫 (2005): ICFの重要性. ICF活用の試み, 国立特殊教育総合研究所・世界保健機構 (WHO), ジアース教育新社, 6-10.
  - 26) 清水貞夫 (2004): 特集 LD・ADHDへの対応と「特別支援教育」. 学校経営, 49 (3), 第一法規.
  - 27) 高橋実・西澤直子・上田征三 (2003): 保育所における「気になる子ども」の実態と支援の課題 (2), 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, 746.



- 28) 高畑芳美 (2005) : 「気づき」から「手立て」の共有へ. LD&ADHD, 13, 50-53.
- 29) 竹谷志保子 (2005) : 発達が気になる子どもへの保育支援-ADHD・LD・自閉症児の理解と関わり方-. 月刊 保育情報, 388, 2-9.
- 30) 竹内進 (2004) : 運動会の意義を問い直す, 大阪千代田短期大学, 33, 89-108.
- 31) 田中康雄 (2004) : わかってほしい! 気になる子. 学習研究社.
- 32) 東條吉邦・高森明・迫持要 (2004) : ADHD・高機能自閉症の子どもたちへの適切な対応-成人当事者たちからの提言集-.
- 33) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議 (2003) : 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告).
- 34) 津守眞他 (2005) : 特集 発達障害児の支援に向けて. 教育と医学, 630, 慶應義塾大学出版会.
- 35) 柘植雅義他 (2004) : 特集 特別支援教育-学校が対応する新課題. 学校運営研究, 559, 明治図書.
- 36) 柘植雅義他 (2004) : 特集 特別支援教育. 指導と評価, 50, 図書文化社.
- 37) 上野一彦他 (2004) : 特集 特別支援教育の充実. 教職研修, 382, 教育開発研究所.
- 38) 矢内忠他 (2004) : 特集「特別支援教育」学校はどう取り組めばよいのか. 総合教育技術, 58 (14), 小学館.
- 39) 幼児と保育「気になる子」研究会 (2004) : 気になる子 保育者の支援と理解, 幼児と保育, 50 (4), 51-53.
- 40) 横山浩之他 (2004) : 特集 特別支援教育で学校は変わるか. 現代教育科学, 576, 明治図書.
- 41) 湯汲英史 (2005) : ADHD&ちょっと気になる子の保育アドバイス, 幼児と保育, 51 (3), 58-61.
- 42) 吉岡利栄子・永井玲子・山根司津子・佐々木千幸 (2005) : 多動傾向のあるAちゃんの育ちや気持ちに添った支援. LD&ADHD, 14, 50-53.
- 43) 財団法人こども未来財団 (2005) : <http://www.i-kosodate.net/index.html>.